

# ハームリダクション普及啓発研修事業

特定非営利活動法人 リカバリー

〒065-0033 北海道札幌市東区北 33 条東 15 丁目 1-1 エクセレムビル 4 階

## 助成事業の概要

### 目的及び内容：

コロナ禍でますます多くの人の生存の危機が危ぶまれている。そのなかで薬物使用・薬物依存がある女性、若者、LGBT、精神障害を持つ人を中心に、社会的な脆弱性が高い人の健康と命を守る取り組みが喫緊の課題となっている。なぜなら現在の地域社会には薬物使用・薬物依存を早期発見・早期介入できる適切な支援が欠落しているからである。今後求められる支援がハームリダクションである。ハームリダクションとは、薬物使用の有無にかかわらず、薬物使用により発生するさまざまな被害（ハーム）を減少（リダクション）する支援である。薬物の使用が止まることも選択肢の一つであるため、それ以外の選択肢も含まれる。必要な人に対する治療・回復（薬物使用が止まること）は重要であると同時に、薬物をただやめるかやめないかではなく、薬物使用があっても健康や生活の質が向上できる、そして命を落とすことにならない関わり方が地域社会に存在し、そうした支援を当事者が選択できるような社会に変わる必要がある。ハームリダクションの実践は、当事者視点に立脚し、問題の早期発見・早期介入が可能となる選択肢が地域社会に増えることに他ならない。

本事業はハームリダクションという概念を日本の支援者へその実践者の講義を通して伝える事を目的として行う。

### 時期：

第1回…2021年5月29日 ハームリダクション入門編

講師：古藤吾郎氏（日本薬物政策アドボカシーネットワーク）

司会：大嶋栄子（NPO法人リカバリー代表）

\*第一回目は本事業の事前学習用講義として、助成事業内容には含まれないが、当法人負担で開催している。

第2回…2021年6月19日 ハームリダクションの現場から～アジアの当事者(ピア)ワーカーが大切にしていること～

講師：Sam Nugraha氏（RumahSinggah PEKA代表）

司会：大嶋栄子（NPO法人リカバリー代表）

聞き手：藤吾郎氏（日本薬物政策アドボカシーネットワーク）

情報保障：英・日口語逐次通訳および音声認識文字表示

## 事業の成果

本事業は、先述の通りハームリダクションという実践の在り方を、研修参加者に事前知識を得て頂く目的として、日本薬物政策アドボカシーネットワークの古藤氏より「ハームリダクション入門編」の研修会を開く。\*本事業での経費計上はなく、当法人自己負担で研修会は行われた。

古藤氏からは、ご自身の編著でも「ハームリダクションとは何か - 薬物問題に対する、あるひと

つの社会的選択」の中でも記されている、海外にて大学院修士2年生目にハームリダクションプログラムを提供するNGOにインターンをした経験やハームリダクションとは薬物使用、薬物セ策、薬物関係法規に関連して昌実健康問題・社会・法律上の悪影響を最小限に抑えることを目的とした政策であることや、実際にその活動場面の写真や映像を用いて日本の専門職（研修受講者）へ講義していただいた。加えて、古藤氏からはUNODCが毎年発行している薬物使用者に関する調査をもとに、日本におけるハームリダクションの可能性についても触れつつ、実際の薬物使用経験者の中でも「薬物使用障害」という医療や支援が必要な重篤者の内、実際に治療へ結びつくのは8人中1人であること、そのような背景には依存状態が重く、治療や回復に、無関心。あるいは社会からの差別や処罰への不安や恐怖で相談が出来ないという事も珍しくないと語られた。

本事業の対象である、2度の目の研修は前述した入門編の講義を踏まえつつ、講師のSam Nugraha氏よりインドネシアにおいて薬物依存の回復支援施設がどのようにしてハームリダクションの実践を行っているのかを伺うことができた。また、インドネシアでの薬物事案への政府対応、実際にどのような薬物がユーザーの中で使われているのか、インドネシア国内でも存在しているスティグマやご自身の薬物使用から回復に至り、支援者として現在活躍されている経歴、サムさんの運営されている施設で行われている支援内容を伝えていただいた。

また、本事業では日英同時口語通訳、AIを用いた自動翻訳アプリを駆使し、参加者全員へ講義の内容を余すことなく伝えることができ、参加者は111名となった。

## 成果の広報・公表

本事業については、当法人代表の大嶋英子が連載執筆をしている『こころの科学-日本評論社』2021.9号にて研修内容を掲載している。

## 今後の展開

本事業で取り上げた、ハームリダクションという実践の在り方は、諸外国では既に始まっており、多くの成果を上げている。しかし、前途の通り日本国内ではこの概念自体もまだまだ依存症臨床の専門職、ましてや国民にも知られていないのが実情である。

本事業では研修を2度開催し、200名を超える参加者へそれぞれハームリダクションという概念の紹介をすることができた。

しかし、肝要なのはこのムーブメントをより多くの本人・家族・支援者・国民の中で議論され、薬物使用者が単準に社会から排除されがちな社会から本人にとってのハーム（困りごとやリスク）を取り扱い本人の視点に立ちながら健康や命を守る（リダクション）が今後必要されている。

当法人では、本事業で助成をいただき、この研修を一度にとどめることはせず、同様のテーマを引き続き研修を通して社会に伝え、多くの人たちと議論を重ね、多くの方々の支援の在り方や今後の政策検討の一助となりたいと考えている。